

## 第2回 札幌市国際戦略プラン懇話会 議事録

日時：平成24年3月8日（金）10：00～12：00

場所：札幌市役所本庁舎6階 1号会議室

出席委員：石井座長、雨貝委員、石山委員、加藤（丈）委員、加藤（由）委員、木村委員、熊谷委員、佐藤委員、張委員

### 1. 開会

### 2. 議事

（資料2について、事務局から説明）

<石井座長>

どうもありがとうございました。ただいま事務局から頂いた説明の中で意見・感想があればいただきたい。

<張委員>

事務局から説明のあった構成案は、現時点の仮のものであるだろうから、議論の間で戻ってこられるようにすれば良い。

<石井座長>

あえて言えば、工夫して、読みたくなるような章立てにしていなければよい。

（資料3について、事務局から説明）

<石井座長>

ありがとうございます。それでは、資料3『札幌市が目指す国際都市像』について議論していきたい。これは、前回の議論を定義して、再構成して頂いたものだが、議論を分けて、最初に『札幌市が国際都市を目指す意義』というところについての意見・質問があれば出していただければと思う。

「（札幌市の）現状」のところ、外国人登録者数が少ないと書いてあるが、国内流動で道内の動きを見ると、道外流動というか、あまり外に出かけていないというのが、一つ北海道人の特色としてあると思う。日本全体では海外にいっぱい出かけているが、海外から（日本へは）少ししか来ていないということであるが、この点について北海道はどうか。

<石山委員>

確かにパスポートの発給者数でいえば、北海道は人口に対する割合が低い。これはきちんとしたデータがあるので、そのデータで確認して頂ければと思う。北海道が進めている「もっと海外へ」という動きがあるが、それもパスポート発給者数に基づいた施策であることは間違いないと思う。北海道から海外に出る人は少ないと思われる。今後、国際都市という定義の中で相互交流を目指していくというならば、この点にも着目して施策を展開していかなければいけない。“外を知る”ということにおいては、確かに北海道の人は他県に比べて機会が少ない。

<石井座長>

『札幌が「国際都市」を目指す意義』の最初のところ（①世界を知ることで、札幌を知る）は事前に事務局と議論した際に加えてもらった部分である。来てもらう前に自分達のポジションとして、海外との接点も少なく、意識もないので、こういうあたりをスタートラインにしなければ、なかなか市民にとって“国際化”が身近な問題になってこないのではないかと思った。

<石山委員>

それはこれからどこをターゲットとして国際都市を目指す意義を発信していくのかということに繋がっていくと思う。もっと若い年代をターゲットにしてそういうことを伝えていくべき。例えば小・中・高の学校の授業の中で札幌、北海道、札幌がどういう風に成長していかなければならないかという中に国際化ということがある。それを積み重ねていくことによって、自然と醸成されていく、というのが一番スムーズにいくと思っている。これから色々ところでセミナーや講演活動をするのは、あまりにも労力がかかりすぎると思う。また、不特定多数にしか考えが浸透しない。今、経済活動をしている人はゆるやかな曲線上にいる方々で、2050年になった時にぐっと落ちていく中では、2050年を担う人たちが国際化の考え方を自然に持ち、自分達がやるべきことを成し遂げていくというのが自然な姿だとすれば、若い層から、“札幌はこうあらなければいけない”というのを自分達の中で植えつけていく必要があると思った。非常に必要なことであると思うが、あまりにもターゲットが広すぎるので、確実にターゲットに届くのは義務教育や高等教育の中で議論して進めていくのが一番すんなり入ると思う。アクションプランに繋がる部分もあるが、個人的にはそう思っている。

<石井座長>

ありがとうございます。文化・芸術面では札幌は比較的色彩的な取り組みをやっていて、そういう面では評価できると思う。しかし、それが市民の意識にどこまで根付いているかということに関してはどのように見ているか。

<雨貝委員>

文化や音楽の面から考えると、専門家にはかなり意識が浸透していると思う。もう一つ、教育の面では、私はロータリーで内モンゴルの大学生を受け入れている。教育大学に留学していたその方に聞いてみると、内モンゴルでは今、中国全体のことを知ろうとする傾向があるという。しかし、札幌に留学して、自分達の身近な居住区についてもっと学ぶ必要があると思ったそうである。それは、札幌に関しても、自分達の国に関しても、である。彼女の研究では、そのためには、小学校、中学校の教材がもっと自分たちの地域に関して積極的でなければならないと教材研究について述べていた。グローバル、と言っても、まずは自分達の地域のことを小さい時から学ぶべきであると私も考えた。

札幌が「国際都市を目指す意義」の「③多様性のある社会を実現して新しい価値を生み出す。⇒市民が札幌に誇りを持ち、まちが元気になる」についてだが、まず市民が札幌としてのアイデンティティをまだ確保していないと思う。その辺をもう少し深く広げていってはどうかと思う。

<石井座長>

加藤由紀子委員は大変頷いていたが、いかがか。

<加藤（由）委員>

先週一週間稚内に出張に行ってきて、稚内の学生と話をした。稚内の街には、明確に国際都市であるという意識が若い世代にはある。稚内は向かいにサハリンがあり、国境の街である。彼ら自身が小さい頃から教育を受けてもいるが、より身近なところに多文化がある。しかし、データを色々見せ、中華圏、特に香港や台湾からこれくらい来ている、というのを見せると、そんなに来ているとは知らなかった、と言う。また、データを見せて、半分しか稚内市内には泊まっていなくて、あとはみんな利尻、礼文へ流動していくことを見せて、そこで初めて“ロシアだけではなく、色々なところを見ないといけない”というようにレポートに書いてあった。

翻って、私は国際交流の仕事をしている。留学生が来た時に、最初に札幌についてのガイダンスをする。留学生に教えるのは簡単と言ったら怒られるが、同じことを日本人に教えると、知らなかった、という人が多い。小・中・高の学校で地域のことを勉強してきたのかといえば、実はあまりしていない。小学校3年、4年の学習で地域のことを勉強する一番のピークになっている。どうしてこのようなことがわかるかというと、学生にキャンパスのある周辺の街歩きをさせてみる。その周辺とは豊平であるが、そこは古くから栄えていて、札幌市民第一号も豊平からきている。しかし、そのことを意外と知らない。先ほど石山委員からもお話が合った相互交流というのは大切だと思う。「来てください」と言うには、こちらからも行く必要がある。そのことを考えてみると、「世界を知ることによって札幌を知

る」というより、札幌のことを知って世界に出よう、という方に国際都市の意義があるのではないかと考える。相互交流を担う経済的なメリットは札幌にもたくさんあると思うが、何よりも、先ほど雨貝先生もおっしゃっていた「札幌のアイデンティティは何か」と問われた時に学生が自信を持って答えられるように教育を含めて取組みをする必要があると思う。あと、『北海道学を学ぶ会』で、地域学について学びを深めている 90%の人は 60 代、70 代であるが、ものすごく色々なことを知っている。生きた札幌の地史であると思う。これらのことも踏まえ、札幌が国際都市を目指す意義の一番手前に、札幌のことを知る意義があるという風に考えている。

<石井座長>

ありがとうございます。

<熊谷委員>

反論ではないが、異文化コミュニケーション論の観点から言うと、自分のアイデンティティについても、他者との比較があってこそ自分を発見できる。そうすると、教育も大切であるが、やはり外に行ってみて、如何に日本のこと、札幌のことを知らないかなどがわかる。外に行くという時になって初めてその必要性が感じられるということがある。相互という意味であるが、①にあるように世界を知ることでは札幌を知ることではできないが、その逆は必ずしも真ならずで、札幌を知っても世界を知れるということにはならない。先ほど石井委員の発言のように、物理的に、海外旅行で出ていくだけではなくて、IT やネットの時代であるので、せめて仮想でも外を体験して、外に紹介しなければいけない。そうやって初めて学ぼうという意欲が出てくると思う。

<佐藤委員>

私も同じ意見である。若い人にはもっと道外、できれば海外に目を向けなさいという風に言っている。北海道、札幌は住みやすいということもあり、そこで完結してしまう。札幌にいればそれで満足という人も多いので、もう少し他の世界に目を向けると良い、という話をする。今までお話しされているように、若い人たちが札幌についてどの程度知っているかと言えば、我々から見るとそれほどではないのかもしれない。けども、札幌を知っている割合が 50 だとすれば、海外を知っている割合は 10 や 20 で、更にもっと少なくなる。だから、海外に目を向けるような仕組みを考えていった方が良い。例えば、距離的な問題もあるとは思いますが、九州などは修学旅行で中国や韓国に行く人が非常に多い。北海道でも一部は行っているようであるが、東京や東北に行く学校が多い。出来れば修学旅行などで海外に行くなど、そういう雰囲気を作っていけば、若い人たちの意識が高まっていくと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。

<木村委員>

2月の雪まつりのシーズンに京都から友人を迎えた。その際、友人が札幌の街を見渡して最初に言ったことというのは、信号についてである。内地の信号は横で、札幌は雪が降るので信号が縦であるというのを教科書で習ったと言う。同じ国の中にも、地域の特性などによって変わってくる部分がある。彼らにとっては京都の常識があり、それが札幌の常識に触れた時に「違う」ということで、自分たちの京都、そして札幌というものを認識できたと思う。もちろん海外でも良いが、北海道の場合、一步北海道の外に出るというだけで別の世界になる。例えば、冬場に雪がない、ストーブがいない、など、北海道出身の人間にとっては違和感がある世界なので、別の価値観を知るということに繋がると思う。それが同時に、先ほど雨貝委員からお話しがあったアイデンティティに繋がる。

また、前から考えていたことがあるのだが、“Japan”という単語があるが、最初を大文字にすると「日本」であるが、小文字にすると「漆器」という別の意味になる。“Sapporo”という単語で考えた時、最初を小文字にすると何になるだろう、ということを考える。もちろん辞書には載っていないが、“japan”も“china”もそうであるが、国と、その国を **represent** するものが出てくる。“Sapporo”を **represent** するものは何であるか、もちろんまだ答えは出ていないが、それを作っていくということがアイデンティティになってくるのではと考えている。他の都市と比べて札幌が特に **identify** される部分として考えられるのは、今回の資料の中の「国際都市を目指す意義」の右部分の特に2点目であると思う。“札幌は多くの転入者を受け入れながら発展を続けた街”という点で、これは、言われてみればそうだな、という気がする点である。前回も少し触れたが、私は神戸出身であり、札幌には大学から入ってきた。私の場合は祖父が札幌出身であり、そういう意味では出戻りであるが、もともと札幌出身ではなくて、居住地として初めて6年ほど前に移ってきたので、転入者である。転入者が集まってできた街であるというのは、言われてみて初めて気がつく部分であると思う。この点を再認識するということから、小中学校の教育においても、札幌の特性、日本の中ではどういうところなのだ、というところから始めて、札幌を **identify** していくものがあれば良いと思う。

もう一つ、アクションプランに絡むかもしれないが、地下街でよく「札幌市民憲章」を見かける。昭和38年の11月制定のものである。最後の部分に“札幌の目指す方向”として、高い文化の街としての札幌、ということが書かれている。当時の考え方で「高い文化」というワードを使ったと思う。来年で設定されて50年になるので、札幌の中で文化を作るというよりも、文化の一つの交差点としての札幌という方向性で考えるのであれば、市民憲章を再検討する機会ではないかと考えている。

<石井座長>

市民憲章自体を再検討するということですか？この発想をここでも活かした方が良いということですか？

<木村委員>

発想を活かすということです。市民憲章自体、とても良い内容であるが、「高い文化」というワードが、これからもそのワードで良いのか、ということで少し考えるところはある。

<石井座長>

文化や芸術の部分というのは、案にある「札幌が国際都市を目指す意義」には必ずしも含まれない面として、一つの方向性としてはあるのかもしれない。①のところをもっと広げるのか、非経済的な面でも、街づくりの基本ということで、多様性だけの面ではなく、少し考えてみても良いかもしれない。

<張委員>

“札幌が「国際都市」を目指す意義”の中の「①世界を知ることによって札幌を知る」というのは、その通りだと思っている。世界を知らなければ課題は見つからない、というのは間違いない。ただ、手段として、本当に交流人口を増やすべきなのか、皆さんがおっしゃったようにインターネットなど、今はもっと世界を知ろうと思ったら色々な方法がある。交流人口の中で、来てもらうのはもちろん増やすべきであると思うが、こちらから出る人はやはり限界があると思う。やはり、人口からみても、上海から 100 万人来たので札幌から 100 万人行けるか、といっても行けない。大事なことは世界を知ることなので、行政がもっと出て、よくわかったことを知る、これも一つの方法である。あるいは、教育機関の人がよく世界に出て、知ったことを伝えるという方法もある。形としては「世界を知る」というのは非常にいい表現であると思う。

もう一つ、皆さんの議論をよくまとめたと感じているが、最後に魂に訴えるものが足りないという感じがする。例えば、札幌が目指す国際都市と言っても、何の国際都市かということである。前回も話に出たが、ウィーンであれば「芸術」などである。札幌の強みを一言で表現できることがサブタイトルなどで入れればよりはつきりすると思った。先ほども話に出たが、非常に素晴らしい市民憲章を持っていて、本当にその通りの札幌になりつつある、ということを感じている。「高い文化」という表現は、「文化」とすると少しわかりにくいかもしれない。海外の人にとっては歴史も文化に入るかもしれない。色々な文化があるが、私が感じる札幌の文化というのは「芸術」である。しかし「芸術」と言っても、室内の芸術というよりは自然と共生している芸術である。芸術の森も、モエレ沼公園も PMF も、東京とは違うものがきっちりある。“自然と芸術”というのをポイントに絞るというのも面白いと思う。芸術だけではまだヨーロッパに負ける場所もあったりするが、何か

と抱合せて強いものが一つ国際都市の前に入れば良いと思う。それが何かという点に関してはもっと議論する必要がある。

それから「②世界で札幌の強みや資源を活かし、人・モノ・情報・資金を取り込み元気な経済を生み出す。」というところの“モノ”というのは一体何を指すのか。全部にするとどうしてもぼけてしまう。“人”というのは大切なので絶対はずせない。“情報”は皆言っているので、あえて言う必要もないのでは、とも思う。「文化の交差点」といういい言葉が出ていたが、外からの文化を取り入れるという意味で、ソフトな部分があっても良いのかなと思う。

<佐藤委員>

ここでの“モノ”というのは、いわゆるものづくりの、二次産業などの“モノ”であると解釈した。

<張委員>

だとすれば、表現を変えた方が良いかと思う。“モノ”だけだと「製造業を取り入れよう」という話などがあったが、札幌でそれをやっても勝てないと思う。

<佐藤委員>

勝てないかどうかはわからないので、“モノ”でもいいんじゃないかと思う。

<石井座長>

今の視点は重要であり、全体を一言でどうアピールするかということである。今の張委員の話では“自然・芸術”あたりを中心にとということであったが、私は「一番札幌らしいものは何」と聞かれれば「雪」と答える。これも自然の一つの変形であると思う。全体を通した方向付けということが必要だと思う。②については、ありとあらゆるものを取り込むという議論もあったので、先進的に絞るということも議論してみる必要があると思った。

<張委員>

先ほど“モノ”という話をしたが、北海道には良いものがたくさんある。“モノ”がだめだということではなく、取り入れるというよりは、うまく加工して外に出すということを考えた方が良く、という気がする。

<熊谷委員>

ヒト、モノ、カネ、など、カタカナにすると経済用語としても色々なものを含むのでこれはこれで良いと思う。先ほどのところでより色々なものを網羅できる言葉が良いと思う。焦点がぼけるといいうのも一つあるが、例えば「音楽の都ウィーン」のように強いものがな

い場合、絞りこみすぎるのも諸刃の剣である。広く網羅できるものを3つくらい挙げるのが良い。

<石井座長>

むしろ、これから重点的に取り組むべきことが絞れば、それをキャッチフレーズにするということも可能である。他のことを辞めたり無視したりする形でなく取り組めるかどうかということである。

<加藤（丈）委員>

“札幌が「国際都市」を目指す意義”と書いてある割には、この「札幌」という言葉をたとえば福岡や名古屋などに置き換えても意味が通る文章である。何故これが「札幌」が国際都市を目指す意義なのか、というところが少しわかりづらくなっている。札幌という都市の特徴を踏まえた上で、「こういう意義がある」というのをもう少し出すべきである。先ほどの「自然と文化」も一つのワードになり得る。または、多文化共生という意味では、アイヌの文化もある。ここに取り組むと、ぼけてしまうかもしれないが、これらの視点があっても良いと思う。北海道が持っている強みというのものもある。先ほども話に出た「北海道にもたくさんものがある」ということについて、例えば水産資源や酪農などもある。北海道の強みを世界にアピールするというのも一つであるし、豊富な観光資源で観光を呼び込むというものもあると思う。多文化共生ということでは留学生が多いというポイントもあるが、世界の人にアピールするための札幌の強みはどこかということにより意識するのが良い。国際都市像というのは総論的な部分なので総花的にならざるを得ない部分であるが、全体的に出ている意見はこういうところに集約されるのかな、という印象を持った。

<佐藤委員>

今加藤委員がおっしゃったことは資料3下段の札幌の目指す国際都市像というところにかかわると思う。“札幌が「国際都市」を目指す意義”というのは、現状がどうであるかということなので、これは福岡などと同じような感じになる。あるいは、福岡に比べてこれが足りないからこの辺を中心に組みもう、などとすることが結果的に市民にとってのメリットとなるということだと思う。

<石山委員>

「札幌ライフスタイル」というのがあらゆるところにキーワードとして入っているが、これは何であるのかということと“意義”を上手くマッチングすれば皆さんが納得できるのだと思う。なので、先ほどはあまり言葉にこだわらなかった。

<加藤（丈）委員>



総論があって各論があるので、総論でそこをもう少し意識した表現を入れなければ各論が生きてこないと思う。

<石井座長>

いずれにしても「自然と文化が共生する街」など、札幌市を特色づけるキーワードは意義のところにも必要だと思う。どういう国際都市を標榜するのかという意味でいうと、意義にもあって、「目指す都市像」でよりブレイクされるという形が訴える力がでてくると思う。意義を狭めるというのではなく、市民にどう訴えるかというところで、共感できる意義を提示することに関してヒントとなるようなワーディングはいくつか出たと思うので、そこをもう少し考えていただくということではいかかと思う。

<佐藤委員>

資料3「札幌市の現状」のところで質問がある。札幌市の現状で、外国人登録者数9,500人。総人口に対する外国人割合は0.5%と政令指定都市の中で最も低いとあるが、大体どの程度の数値が普通なのか。

<石井座長>

これは、指標としては少し危険であると思う。その意味としては、外国人登録者数というのは、ベースが在日の方なども含むので、その部分の母集団が少ないか多いかでかなり違ってくる。最初の時も少し申し上げたが、現実にはこれをベースとしてみて、札幌市は国際化が進んでいない、とは言わない方が良いのではないか。

<事務局>

割合を示したものでは、大阪市が一番高く4.5%である。

<石井座長>

大阪市に近づけるべく札幌市が4.4%になれるか、という少し無茶なことだと思う。

<石山委員>

産業構造も違うので、指標とするならば断わりを入れるべきである。

<石井座長>

“遅れている”ということは示していただく必要があるが、示すための指標はもう少し上手に選ぶ方が良くもされない。

<佐藤委員>

数字だけ示すのは良いと思うが、一方で、外国人割合が低いから外国人登録者数を増やすと言い切ってしまうのはどうなのか、と思う。

<事務局>

総人口に対する外国人の割合の全国平均では 1.76%である。

<雨貝委員>

工場や加工業があればその割合は増える。

<石井座長>

大阪は在日の方も圧倒的に多いので、そこは無視できないところである。

<事務局>

あとは浜松などもブラジル人が多い。製造業に密着していると思う。

<石井座長>

数値が高いところは、逆に国際化が問題になっているという側面もある。

<張委員>

単純に「指標」というよりも、今は労働力の問題がある。札幌も、この経済を保っていくのに、労働力の人口の推移などを含めて考えた方が良い。必要であれば定着数を増やすなどである。

<事務局>

ビジネス面では製造業と密接に関わり合うが、今、各大学も一生懸命留学生の獲得に取り組んでいる。そういう方に大勢札幌に来てほしいという気持ちは強く持っている。

<石井座長>

道内全体でいえば、農業などの分野でも研修生の受け入れが必須となっている。もちろん札幌市はそういう分野はあまりないし、積極的に受け入れるかといえばクエスチョンマークがつく話だが。

<熊谷委員>

先日、イギリスのギャップイヤーの学生を受け入れる団体の代表の方が日英協会にいらした時「受け入れ先を探していて、ニセコ、倶知安にようやく 1 軒出来た」と言っていた。札幌にこんなに企業があるのにインターンシップの受け入れ先もなかなか見つからなかつ

た、という話を聞いた。北海道ビジネス協会という、ここでビジネスをしている外国人のための協会があるが、そこが積極的にインターンシップを受け入れようということをしている。もっと札幌市が働きかけ、札幌市にある企業にインターンシップを受け入れるべき。大学の留学生というのは文部科学省の縛りがあり、活動をして成果は少ない。個々の大学の負担がとて大きい。企業のインターンシップを進めるということが出来ればそういう需要も増えていくと思う。

<雨貝委員>

今留学生の話が出たが、20年前には留学生はほとんどいなかった。何故増えたかと言えば、札幌市の方針で確か1986年くらいに「サッポロ・アンバサダー」という英語の雑誌を世界に発信した。そのおかげで教育大学もイギリスからの申し出を、市を通して受け入れることが出来た。その後、教育大学はすぐに瀋陽とも協定を結び、各国とも協定を結び、留学生を受け入れているという経緯がある。この点では20年の間に素晴らしい飛躍を遂げていると思う。留学生をただ授業で学ばせるのではなく、企業研修など、そういうところにも一つの体験として派遣している。留学生を受け入れるということは、もっと理解すべき良いところがある。これからどんどん留学生が増えて、その対策も広がっていくのでは、と考える。

<石井座長>

ありがとうございます。下段にある「札幌の目指す国際都市像」に入って議論を続けたいと思う。先ほども最後の方は少しこちらに近い話であったが、改めてどうでしょうか。

<張委員>

先ほども石山委員からお話が出たように、札幌ライフスタイルについてだが、その中身についてもっと皆で議論しても良いと思う。札幌が良いから、北海道が良いから外に出たくないと言いが、それでは何が良いところなのか。

<石井座長>

事務局で整理した際はどのようなイメージでしたか。

<事務局>

事務局でも特に固めきれていないので、皆様から意見をいただければ思っていた。

<雨貝委員>

色々と情報収集をしているのだろうと思うが、自分自身も狭い範囲ではあるが情報収集をしている。何故札幌がよいのか、と札幌にいる外国人の人に聞いてみると、福岡にいた

がわざわざ札幌を希望して来たという語学教室の先生がいた。理由を聞けば「札幌には春夏秋冬がある」という。我々住んでいる人にとっては、札幌は寒いところであって、冬は嫌だと思うが、実は春夏秋冬それぞれに良いところがあるというのが一つである。雪が降っても交通機関も便利である。夏は湿気がなくて快適でもある。また、私が納得したのが、身近に素晴らしい公園がある、ということである。こんなにたくさん身近に公園がある都市というのはないと思う。滝野公園やイサムノグチの公園など、テーマを持った大規模な公園がある。その方に聞くと、少し歩けばすぐ公園があり、緑が多いと言う。そういう良さがあるということも私も再認識した。

#### <張委員>

私も16年札幌に住んでいて、札幌が良い、札幌にずっといようという決断を最終的にしている。雨貝先生が言った部分と重複するものを除けば、当たり前のことであるが、空気が良い、水がおいしいというのがまず一つある。また、札幌というのは自然に本当に近い都会である。北海道のほかの土地ではなく、札幌だから良い、というのもある。自然に恵まれている都会としての機能がある。そこに文化、芸術、スポーツなどがある。商業施設もある。全道のおいしいものも全部札幌に集まってくる。もう一つは、春夏秋冬を通してレジャーが出来るということである。しかも1時間程度の距離のところまでできる。残念ながら札幌には海はないが、海にも1時間もかからず行くことが出来る。海にも山にも行けて、冬にはスキーが出来て夏にはゴルフができる。中国では飛行機に乗っていかなければできないようなことが、札幌では全部できる。お金をたくさん稼いで高層ビルの中でロマネコンティを飲みたいのなら東京や上海に行けばよい。北海道スタイルとは合わない。北海道は、そこそこ仕事をして、ある程度経済的にしっかりしていれば札幌では豊かに暮らせる。こういうところが札幌の良さであると思っている。

#### <熊谷委員>

都市と自然というのは、市民はあまり自覚がなくとも、海外から来た人は皆賛成するところであると思うので、国際都市像の中に入れてしまっても良いと思う。

#### <雨貝委員>

私が先ほど言った「公園があちこちにある」と言うことも、その良さをどういう風にアピールして利用するかということである。循環するバスを作るなど、そういうことをしなければ、ただ「ある」というだけで終わってしまう。その辺が行政の役割であると思う。

#### <加藤（由）委員>

確かに札幌というイメージをとらえた時に、都市であり、自然に恵まれているということとは都市イメージを作る際には何もマイナスになることはない。しかし「ライフスタイル」

と言った時、そこに住んでいる人はどういうライフスタイルをしているのか、たとえば、自然がある、公園がある、というのをイメージ出来るだろうか、ということを今思っている。

#### <張委員>

市民自体が札幌ライフスタイルに気が付いてないというのが問題である。やはり強力にPRしていく必要がある。海外の人の方がそういうことに気がついてニセコを訪れたりするが、実際にそこに住んでいる人は家の中で毎日ゲームをしているのでは、札幌ライフスタイルはできない。せっかく札幌に住んでいるのだから公園に行こう、外に行こう、というのが、実はものすごく大切である。

#### <石山委員>

四季が楽しめて自然と都会が共存している街というのが住みやすい街であるというところは皆共通していると思う。自分が一つ引っかかっているのは、生きてくためにはどうしても働かなくてはならないということである。札幌は経済力が弱いという面があるので、住むのは良いがどうやってお金を稼いでいくのか、ということがある。この部分においてももっとしっかり目指すべきところを作っていくべきだと思うので、ライフスタイルの中には是非そういう要素も入れて検討して頂きたい。

また、次の項目の「世界の人が訪れたい街」というのにいくと、皆さんご存知かもしれないがピーチアビエーションという新しいLCCが就航した。この夏にはエアアジアジャパンというLCCも成田ー新千歳を飛ぶ。また、ジェットスター・パシフィックなども成田ー新千歳を飛ぶ。新千歳に入ってくる数としては、日本人も外国人もこの夏以降飛躍的に増える。特に外国人が札幌に爆発的に入ってくるというのが偶然にもこのタイミングで来てしまう。以前も個人旅行化が進むという話をしたが、これを受けてますます個人旅行化が進んできて、札幌の街の中に札幌を知らない人たちがどんどん増えていく。このことへの対応は近々のテーマであると思っている。この辺をよりわかりやすくして、目指すところをこの辺に落とし込んでいくべきだと思う。前回はホスピタリティの向上という話が出たが、そこをどう表現していくかというのを、アクションプランも見据えながら考えていかなければいけない時期になってきていると思うので、ライフスタイルの確立と働きやすさということと、個人に対する対応、ホスピタリティというところをもう具現化していく時期に来ているということをお話ししたかった。

#### <石井座長>

食べていくという部分は確かに非常に難しいというか、一昔前は札幌の独身女性はファッションをリードすると言われていて、それは一定の収入がベースだったようである。しかし、全体的に収入が減る中、そのような機能はほとんどなくなったといわれている。ラ

ライフスタイルについていえば、通勤族にとっては天国のようなところであると思うが、ずっと住んでいる人にとっては、冬には雪が降って寒くて嫌で、稼げないし仕事はロクなのがない、という風に大多数のイメージを集約するようになってしまう。これは非常に二極化していて、何かを変える必要がある。もちろん、このプランでどこまで変えられるかということはあるが、良さをどう認識できるかというところで、外からのアピールを見せていくということは意味があると思う。経済の話はどこまで書いていただくかということもあるが、確立過程で色々なことが考えられるというか、人が来ることを上手に活かすという面があるのかもしれない。色々な見方があるが、かつてはすすきのは非常に安全な街であり、若い女性が夜中まで行動できるという、他所から見ると、優れた歓楽街であったが、今はそういう位置づけではない。今はとても地盤が沈下していて、札幌の地元経済ということで考えればものすごく影響がある。こういうことに対して明確な対策というのはあまりされていない。人を外から受け入れていくという中において、ライフスタイルということも含めて、すすきのをどうこうということではないが、街の機能や、そのバックとしての経済というのは考えようがあるのではないかと思った。

<佐藤委員>

札幌ライフスタイルは色々なイメージがあると思うが札幌の良さを世界に向けてアピールすることで、世界から来ていただく、世界の人が訪れたい街になる、そして経済を活性化したい、というのが今回の札幌が目指す国際化の一つの目的であると思う。ライフスタイルの中に経済を入れるかどうかは別としても、人の交流で経済を活発化したい、というのはある。

<熊谷委員>

「世界の人が訪れたい街」について、観光がビジネスに直結するせいもあると思うが、“訪れる人”というところが強調されているように感じる。企業誘致や個人起業家などがもっとあっても良い。定住や暮らすというのがもう少し入った方が良いと思う。通過型ではなく、訪れたことが繋がるということがある。

<佐藤委員>

今の意見は三番目（多様な人が暮らす街）に入れるのが良い。

<加藤（由）委員>

ホスピタリティの向上というところにおいて、ホスピタリティとは何かという時に、接客・説明態度などにしか注目されていないのが北海道観光の問題ではないかと思っている。トータルで、受け入れる土壌を含めてホスピタリティに包含されると思う。

資料下にも、海外からの来訪者に道を尋ねられた時ちゃんと対応できる、ということが

書いてあるが、その前に、ちゃんと看板などに示されるべきだと思う。道を聞かれて答えられるのが一番良いが、ホスピタリティという言葉がここまで出てきているにも関わらず、それが対人のところで推移してしまっている。景観も含めたホスピタリティもあると思うし、ツールとしての看板や、多言語表記も受け入れのためのものである。もともとホスピタリティというのは助けるというところからきているので、弱者救済とまでは言わないが、ありとあらゆる困難に対する救済という意味を含め、そこまで考えた上でのホスピタリティという意味を使って欲しいと思う。

<熊谷委員>

インフラとしてのホスピタリティということですね。

<石山委員>

とても必要なことであると思う。アクションプランに入ると思うが、“これに対応できていたら星が付く”というような、格付けではなくても、目で見てわかるような指標をどんどん札幌の中で取り入れていくべきだと思う。そのことが訪れやすい街に繋がる。それがあれば、他よりも値段が高くても買ってもらえる可能性は出てくる。そしてそれが単価アップに繋がっていく。ホテル、レストラン、公共バスなども含めて色々な形で指標を出していくことが活動に繋がっていく。色々な都市で今この発想が出てきている。実現させている都市もあると思うが、札幌でやるというのはとても効果があることだと思うので、是非このような観点でも考えていただきたい。

<石井座長>

必要な部分であると思うが、行政が差別をするというのは一番難しいことであると思う。

<石山委員>

格付けというとその中で順番をつけることになるが、「〇〇に対応できています」と言うと、それはホスピタリティの指標となりうる。対応力評価という手法。

<石井座長>

価格競争のまま観光業界を走らせることの方がマイナスであるので、頑張っているところを評価することもしなければ全体としての底上げや基盤作りはできないのではないかと思う。

<石山委員>

まず公共施設から始めるというのが良いかもしれない。

<熊谷委員>

札幌においてだけではないが、外国人がよく不満を言うのは、タイトルだけが英語で、中身は日本語であり、飾りとしてだけの英語であって何も情報を得る事が出来なかったというのを聞く。また「世界の人が訪れたい街」の二番目で“個人旅行で来た人が繰り返し楽しめる”という表現で、とても狭くなってしまっているのを、“個人旅行”や“繰り返し楽しめる”ではなく、もっと広げて、違うワーディングの方が良いと思う。あと、通過型ではなくどのように滞在してもらおうかということでは、観光ではなく体験型のワークショップなど、個人旅行で楽しめるだけではないものを取り入れるのも良い。

<石井座長>

繰り返し来てもらおう人を増やすという趣旨であると思うので、そこをもう少し広く書いていただくと今の熊谷委員のご指摘に当たると思う。

<木村委員>

体験型ワークショップという切り口ということに関しては、個人観光から入るということもありだと思う。一度来てみて、その最初の印象がリピーターになるかどうかの大きな基準になると思う。個人旅行客で、全く日本語が話せない状態で新千歳空港に降りる人たちにリピーターとして、また訪れる街として選ばれるような第一印象を持たせるというのが大事である。先ほど石山委員からお話しがあったピーチアビエーションについてだが、昨日自分は関西からピーチアビエーションで新千歳空港まで飛んできた。LCCの新千歳空港への就航は増えていくとは思いますが、新千歳空港は今「北海道ショールーム」という名称で国際線ターミナルの就航と同時に拡張を行っており、それは2階より上である。1階も大規模な案内所はないと思う。到着したお客さんが案内所にまっすぐ行けるような、札幌駅の西口北の部分にあるような雰囲気案内所を今後空港に作るのも良いと思う。千歳のことであるし空港会社などとの兼ね合いもあるであろうし、市の一存で出来ることではないのは承知の上ではあるが、ひとつの案ではある。

<張委員>

札幌駅のプラザはわかりやすいが、案内所は奥まっついていてわかりにくい。

<熊谷委員>

新千歳に降りてからでは遅いのではないかと。LCCの利用客はお金がないわけではなく、飛行機代にお金をかけたくないだけであらかじめネットなどで情報収集して計画をして来る人だと思う。

<石山委員>



両極端です。もともと LCC は今まで旅行に来られない人たちを対象としている。エアアジアはまさにその通りでタイトルが「Everyone can fly」である。飛行機に価値を求めない人は LCC に乗り、ハイサービスを求める人が既存キャリアに乗るという形で、ヨーロッパもアジアも完全に住み分けが出来ている。日本でも既存キャリアに乗る人と LCC に乗る人はお客様の層が違う。ビジネス客が多いのは前者であり、家族連れや若者が多いのは後者である。

<熊谷委員>

LCC に乗る人は自分でネットなどで情報を収集する人であると思うので、千歳に降り立つ前の情報発信が大切であると思う。

<加藤（由）委員>

アクションプランでの情報の出し方というのも明確にする必要がある。

<石井座長>

事務局より資料 4 について説明いただき、続けて議論に入りたい。

(資料 4 について、事務局から説明)

<石井座長>

どうもありがとうございました。まず施策展開の考え方と方向性の中の「ターゲット地域の設定」と「横断的戦略活用」について意見をいただきたい。積雪寒冷都市というと、具体的にはどのような所と交流するのが良いのか。

<事務局>

冬の都市市長会議において 10 か国 19 都市と交流がある。この間はエストニアから 1 市も加わり、札幌市の関わりがまた広がったところである。

<佐藤委員>

寒冷地や夏場の涼しい気候に着目するならば、中東など、熱い地域の富裕層にアピールするのも良い。彼らは夏場、スイスやロンドンなどに避暑に行く人が多い。日本に対しての印象も良いので、札幌としては熱い地域に住む人もターゲットにしてはどうかと思う。

<石井座長>

積雪というのはアピールにはなると思うが、同規模の都市と考えるとあまり浮かばない。むしろ暖かい地域の人々が雪を見に来ると思うので、ターゲットが真逆になると思う。

<事務局>

観光の観点ではおっしゃる通りだが、まちづくりの部分で北方圏の生活やライフスタイルを取り入れようという視点である。具体的にはカナダなどである。地下歩行空間やなどである。

<雨貝委員>

中東という視点は大切かもしれない。アジアに住んでいる人より情報がないので、青森のりんごひとつとっても感激が大きい。そしてお金も持っている。是非ターゲットとすべきである。

<加藤（丈）委員>

ドバイにはショッピングセンターの中に人工スキー場があったりする。

<石井座長>

札幌がまちづくりにおいて積雪寒冷地として誇れるものは何か。

<事務局>

街灯である。札幌にはナトリウム灯はなかったが、冬の都市市長会議によって導入された。

<加藤（由）委員>

除雪体制や降雪予測・配備についても札幌の技術に勝るものはないと思う。ターゲット地域はこれで良いと思う。雪害なども災害の一つであると思うので、こういった面で札幌の技術の高さは売り物になりえる。

<石井座長>

ヨーロッパは集中暖房や熱供給が一般化している。札幌は個別暖房が多いのでCO2などの面で見ると効率が悪いと思う。個人的には積雪寒冷地としての取り組みはあまり盛んではないと思う。

<熊谷委員>

冬の都市市長会議に通訳者として参加して思うが、上下水道技術をはじめ進んでいる分野も多い。

<石井座長>

もちろん技術はあると思うが、今日まで一生懸命やってきたか、というとまだまだな面もあると思う。

<雨貝委員>

ドイツでは CO2 対策として灯油の消費量が 1/5 のボイラーを使用しているので、こういうものをまちづくりの部分で積極的に取り組んでいただきたいと思った。

<石井座長>

ヨーロッパを活かした街づくりとなると、札幌のエネルギー消費構造をどうしていくかというのは具体的な話としてとても大きなテーマだと思う。横断的戦略活用という点においての意見はいかがであるか。

<佐藤委員>

連携というのは大切である。それによって強みが増す。

<張委員>

今そういった取り組みはあるのか。

<事務局>

昨年発足した国際戦略連絡会議がある。月に一回関係部が集まり情報交換をしている。プランが出来た際の進捗状況の確認などにも活用するつもりである。

<石井座長>

市長も広域連携を一つの目標として言っているので、他の自治体との連携は大切であると思う。Win-win の関係を作るのも大切だと思うので、例えばニセコと札幌などで相乗効果を狙うなど積極的な視点として盛り込んでいただきたい。

<佐藤委員>

企業誘致も札幌単独では難しいので港のある石狩市や空の玄関である千歳市や、スペース的に札幌の後背地にある工業団地と連携するなど他の自治体との連携は大事になってくる。

<石井座長>

コンベンションの誘致は国際化に関わることだと思うが、たまたま札幌のコンベンションの指定管理者が道外資本であり、他にも管理しているところがやっているが、これは大切なことである。国内では東京や京都に勝つのは難しいが、例えば福岡と組むなど、発想

として今までとは違う誘致の戦略が必要であると思う。夏は集まるが全体として伸び悩んでいる状況だと思うので、国内外の他の都市と組むことをしてみてもよい。

続いて、評価指標の設定についての意見をいただきたい。

<木村委員>

評価指標の中でも特に、市民がいかに動くかが重要である。5年前のワールドカップの際、市民がどれくらい動員出来たのか。日本人がほとんどいない区画もあったので、市民をどれくらい巻き込んだかという面で疑問を抱いた記憶がある。評価指標と進捗のチェックということにおいて市民をどれだけ動かしているかということが一番重要視されるべきである。

<石井座長>

指標としてはどのようなものが良いか。

<木村委員>

計るには動員数がわかりやすい。イベントの作り方としても、近くを通りすぎた人が気軽に参加出来るような、市民を動員できるものが良い。

<石井座長>

基本的には統計として図れるようなものが並んでいるが、最後の“意識調査”という部分は他とは違う。苦心して指標を挙げていただいているとは思いますが、意識調査はコストの割にあまり意味がないかもしれないので数値として採れるものを指標とした方が感覚で流されないように出来るので、もう少しこの部分をご検討頂けると良い。

<加藤（由）委員>

定量調査にこだわらず定性調査もある。広告媒体にどれほど出したかなどで、手段として計れる部分はある。如何に多面的に情報を出しているかというのをみることはできる。いままでこちらから出した情報はどれくらい露出したかが分かる資料はあるか。

<事務局>

そういう資料は、今はない。

<加藤（由）委員>

そういう細かいものを調べるのも一つであると思う。

<加藤（丈）委員>

具体的な数値目標とその効果の具合を測るという二本立てになると思う。結果としてどの程度、多文化共生が達成されたのかを計る指標というのはなかなかないので、達成具合を数値化するのは難しい。そこは施策目標で具体化するしかないと思う。

<石井座長>

必ず数字に縛られる要素は出てくる。あまり指標化しすぎても本来の狙いとのミスマッチが生じる可能性がある。評価指標は非常に重要な論点であるので、また後程議論できればと思っている。

主な施策の柱というところでお気づきの点があれば意見をいただきたい。

<石山委員>

「(2) 海外との集客交流の拡大」に“MICE の戦略的かつ積極的な誘致”とあるが、是非「国と連携」という言葉を入れていただきたい。国際会議は、環境省、経産省と上手く連携をして誘致するというのが、一番結果が出やすい。受け地から発信するだけでなく、積極的に仕事やイベントを取りにいくような姿勢が必要である。また、札幌に一番実現して欲しいこととしては、査証特区である。中国や東南アジア地区にとっては査証の壁がまだ高い。新千歳イン新千歳アウトに限っては査証を免除するなどの動きで交流の数字を伸ばしていくというのが近道である。この部分では沖縄に先を越されているし、東北もビザ特区が下りそうなので、札幌でも動きをしていきたいと思う。

また「(3) 多文化共生社会の推進」の中で、先ほどターゲット地域に中東という言葉が出たが、インドや東南アジアも含め、各宗教への対策をしっかりと取るべきである。特に食の面に関して、北海道は遅れをとっていて、ハラールへの対応がなされていない。食べられないものに対応したり、簡易モスクを設置するなど、そういったことが来やすさに繋がる。雪まつりの時期にインドからお客様に来ていただいたが、結局食べるものがなかった。ベジタリアンにも対応が出来ていなかった。各宗教とそれに準ずる食への対応というのもしっかり入れていくべきだと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。

<張委員>

「(2) 海外との集客交流の拡大」の“医療通訳体制の確立”があるが、医療通訳だけではなく全体として通訳の数も足りなく、質も低いと思うので、もっと広い意味で通訳の数と質を高めるなどの言葉の方が良いと思う。

<熊谷委員>

本来はボランティアに頼るべき分野ではないが、現状はそうせざるを得ないため、質の問題も起こり得るので、プロとボランティアの役割分担をきちんとすることが必要である。

「(5) グローバル人材の育成」と「(6) 海外諸都市とのネットワークの拡充」については、姉妹都市などのネットワークが少ないと思うので、一地域に限らず、お金のかからないものでもっとたくさん増やすのが良い。また学校の姉妹校も増やしていったらいいと思う。これは市がフレームワークなどを提供し、マッチングをしていくべきである。

<木村委員>

「(1) 世界でのプレゼンス向上」について、市民の中に姉妹都市の存在感があまりないと思う。ミュンヘンクリスマス市など、イベント時に思い出す都市もあるが、思い出すことすらない都市もある。大田とも交流はあるが、そこまで身近に感じられるようになったかというところではない。姉妹都市との関わりを強く持つべきである。姉妹都市ウィークなどを設け、地下歩行空間などのスペースで各都市が PR できるようにするなど、お金をたくさんかけるというのではなくとも出来ることはあると思う。この際、人を使うということが大切である。ただ展示するというのではなく留学生を活用するなどが良い。人を配置することでイベントも効果的に動かしていくことができる。

先ほどの医療通訳の話を含めてだが、観光客が目的地に向かっていくのに最初のコンタクトをするのは北海道に着いてからであるので、そこですぐに動けるようなスペースや機関を作るのが良いのではないかと。また、韓国では電話一つで通訳をしてくれるサービスを観光公社が行っている。コストがかかるので行政としての実施は難しいかもしれないが、通訳を現場に配置できないのならば、通訳できる人間を一つの場所に集約させて、電話を通じて通訳を派遣するというのも有効に活用できると思う。

「(3) 多文化共生社会の推進」において、今後札幌に定住外国人が増えていくことで生じてくる問題として、国際結婚の後に生じる格差があると思う。先月参加したシンポジウムにおいて韓国の事例が紹介された。ベトナム人と韓国人の結婚が最近増えているそうであるが、夫婦の間で学歴格差が生じ、子供の教育水準が上がらないという問題が出ていて、将来この問題はより大きくなると見られているそうである。札幌においても、日本人の配偶者として日本に残留する外国人が増えた時にこのような問題が出てくると思う。将来的に彼らが札幌に居続けた時にどういう問題が起こるかという視野を持って具体的な施策例を加えていく必要があると思った。

<石井座長>

どうもありがとうございます。

<加藤(丈)委員>

「(3) 多文化共生社会の推進」のところでは是非 NGO や市民団体との連携というのを加え

ていただきたい。この懇談会の場にそういった方がいないのも残念ではあるが、市の立場として特定の団体の方に来ていただくわけにはいかないというのもあると思うが、行政が活動するには予算が必要なので、その隙間を埋めるのが民間や NGO の団体でもある。ハブ的な役割として行政が入るのか、もしくは資金的な面で援助をするのかは今後の話し合い次第であると思うが、視点として入れていただければと思う。

<石井座長>

ありがとうございます。

皆さん本日は貴重なご意見ありがとうございます。

私も学内の研究会で明治の不平等条約改正時の国内雑居を認めるどうかの議論をしていたら、当時としても「色々な問題が起きる」という議論があったようだが、結局雑居を認めた結果何も起こらなかったという歴史もある。国際化というのは常にこういう面があり、オオカミがくる、という風に議論はするが、ふたを開けてみると実はすんなり溶け込むというのが日本人の特性であるという結論で終わったのでご紹介しようと思った。ある程度は気を抜いたところで方向付けをして進めていかなければ実際に動かすというのはなかなか難しいのかと思った。